南アルプス市埋蔵文化財調査報告書　第５集

山梨県南アルプス市
Terabe Muratsuki dai6（Ⅱ）

寺部村附第６遺跡 第Ⅱ地点

新山梨環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００５．３
南アルプス市教育委員会
山梨県新環状・西関東道路建設事務所

TERABEMURATSUKI DAI-6 SITE (The second point) EXCAVATION REPORT

例　　言

1　本書は山梨県南アルプス市寺部地内に所在する「寺部村附第６遺跡　第Ⅱ地点」の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は新山梨環状道路建設に伴なって実施した。

3　発掘調査は平成 16 年 1 月 23 日から平成 16 年３月３日にかけて行い、実質調査日数は 28.0 日であった。

4　「寺部村附第６遺跡」は、今回の調査と同様、新山梨環状道路建設に伴い、平成 12 年度から 15 年度にかけて発掘調査が実施され、既に報告書が刊行されているが（南アルプス市埋蔵文化財発掘調査報告書第２集　平成 16 年３月発行）、今回この平成 12 ～ 15 年度の調査地点を「寺部村附第６遺跡第Ⅰ地点」と呼称し、今回報告する調査地点を同遺跡の「第Ⅱ地点」と呼称することとした。

5　調査範囲は、平成 15 年 12 月 10 日から 11 日にかけて実施した試掘調査に基づき、本調査の実質掘削面積は、507.0 ㎡であった。

6　調査は、山梨県新環状・西関東道路建設事務所の委託により、南アルプス市教育委員会が主体となって行い、田中大輔（南アルプス市教育委員会生涯学習課文化財担当）が担当した。

7　発掘調査に従事したのは以下の方々である。（敬称略・50 音順）

　相川晴美・飯室めぐみ・石川久子・今村貞雄・加藤秀代・桜田和子・桜田みさゑ

　山路宏美・山本愛

8　本書の編集・執筆は田中が行った。

9　整理作業は、平成 16 年度に、平成 16 年度に調査を実施した同遺跡第Ⅲ地点と一括して行い、飯室・山路・山本が参加した。

10　本書に掲載した地図は、国土地理院発行 1/50000「甲府」・「鰍沢」、若草町役場発行 1/10000「若草町全図」及び若草町役場発行「都市計画図」1/2500 である。

11　発掘調査・整理作業に際しては、以下の諸氏・諸機関にご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。（敬称略・50 音順）

　櫛原功一・佐々木満・宮沢公雄・山梨県埋蔵文化財センター

12　本書に関わる出土遺物ならびに写真・記録図面類は南アルプス市教育委員会において保管している。

凡　例

遺構凡例

1　遺構の縮尺は、調査区全体測量図 1/250、溝平面図 1/80、溝断面図 1/40、土坑平面図 1/80、土坑断面図 1/40、井戸址 1/40・1/80 とした。平面図に対し、断面図の縮尺が２倍になっているものがあるので留意されたい。

2　遺構断面図中の「267.0」等の数値は標高を表し、単位はメートルである。また同一遺構挿図中の水糸レベルは統一した。遺構記載における単位はmに統一した。

3　挿図中の北方位はすべて国家座標に基づく座標北である。磁北は６°　10′西偏する。

4　遺構断面図において、基本土層はスクリーントーンで示したが、煩雑になる場合は省略した。これ以外に用いたスクリーントーン、ドットマークの凡例は、各々使用された挿図中に示した。

5　本書においては、便宜上遺構名称に以下に示すような略称を用いた。分類基準は以下のとおり。

ＳＤ　溝

ＳＥ　井戸址

ＳＫ　土　坑（土に穿たれた穴で上記以外のもの）

6　遺構の番号は、発掘調査時に遺構種別ごとに確認順に付したものを基本としたため、その所属時期、位置とは無関係である。

遺物凡例

1　遺物注記における遺跡略称は「村６Ⅱ」とした。

2　遺物の縮尺は１／３で示した。

3　土器等回転体に近い遺物の実測に際しては四分割法を用い、遺物の右前半１／４を切り取った状態で作図し、左側１／２に外面、右側１／２に断面及び内面を記録した。また、残存状況によっては遺物の中心を算出し、180°回転して作図したが、この場合は中心線を一点鎖線で示した。また断面等を任意の回転で付した場合は点線で示した。

4　回転体にならない遺物の実測に際しては三角投影法に準拠した図を示した。また、破片資料であるため推定径の算出不能な土器、及び拓影図に関しても同様の作図に依った。

5　陶器・青磁等の施釉範囲はスクリーントーンで示した。

6　本文記載及び遺物観察表における遺物の計測値の単位は cm である。

7　遺物観察表において括弧で示した計測値は、推定値若しくは残存最大高である。遺物の計測値の単位はｃｍである。

8　遺物の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帳』に準拠して付与した。

9　挿図中の遺物番号と写真図版、遺物観察表中の遺物番号は一致する。

目　　次

例　言
凡　例
目　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過 ―― 1

第１節　調査に至る経緯 …… 1

第２節　調査の方法と経過 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 ―― 6

第１節　遺跡の立地 …… 6

第２節　調査区の土層 …… 8

第Ⅲ章　検出された遺構と遺物 ―― 9

第１節　溝（ＳＤ） …… 9

第２節　土坑（ＳＫ） …… 10

第３節　井戸址（ＳＥ） …… 10

第Ⅳ章　総括 ―― 11

参考引用文献
図　版
報告書抄録
奥　付

挿図目次

第１図　遺跡の位置 ―― 2
第２図　調査区の位置と配置 ―― 4
第３図　調査区全体測量図 ―― 5
第４図　遺跡の立地と周辺の調査 ―― 7
第５図　調査区の土層 ―― 8
第６図　溝・土坑・ＳＥ０３断面図（１） ―― 12
第７図　溝・土坑・ＳＥ０３平面図 ―― 13
第８図　溝・土坑・ＳＥ０３断面図（２） ―― 15
第９図　ＳＫ０１出土遺物（１） ―― 16
第10図　ＳＫ０１出土遺物（２） ―― 17
第11図　溝その他出土遺物 ―― 17
第12図　ＳＥ０１測量図・出土遺物 ―― 18
第13図　ＳＥ０２測量図・出土遺物 ―― 19

表目次

第１表　出土遺物観察表 ―― 20

図版目次

図版１　調査区全景（北より）／ＳＤ０１～０３（南より）
図版２　ＳＥ０１土層堆積状況（南より）／ＳＥ０１全景（南より）
図版３　ＳＫ０１・０２・ＳＥ０３（西より）／溝その他出土遺物
図版４　ＳＫ０１出土遺物（１）
図版５　ＳＫ０１出土遺物（２）／ＳＥ０１出土遺物／ＳＥ０２出土遺物

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

平成 15 年 11 月､南アルプス市教育委員会（以下市教委）は､山梨県新環状･西関東道路建設事務所（以下新環状事務所）および南アルプス市建設部（以下市建設部）から、新山梨環状道路の南アルプス市道若草１級１号線取り付け部分について、埋蔵文化財の有無の照会をうけた。これに対し、市教委は計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地であり、計画地に北接する、新山梨環状道路本線部分についても本調査が実施されていることから、事前に試掘調査を実施し、埋蔵文化財の有無を確認する必要が有る旨回答した。

そこで、市教委は、新環状事務所から依頼を受け、当該計画地について、平成 15 年 12 月 10 日から 11 日にかけて試掘調査を実施した。試掘調査に際しては、トレンチ法を採り、各試掘溝は、計画地外に移植予定の樹木が遺存していたことからこれを避けて設置した。各試掘溝の設置位置は第２図に示すとおりである（第２図１Ｔ～５Ｔ）。この結果、４Ｔ及び５Ｔから溝状の遺構とこれに伴う平安時代後半の所産となる遺物を検出するに至った。

これを受け市教委、市建設部、新環状事務所で協議した結果、事業主体である新環状事務所の費用負担により埋蔵文化財記録保存のための発掘調査（本調査）を実施することで合意し今回の調査に至った。

第２節　調査の方法と経過

（１）調査の方法

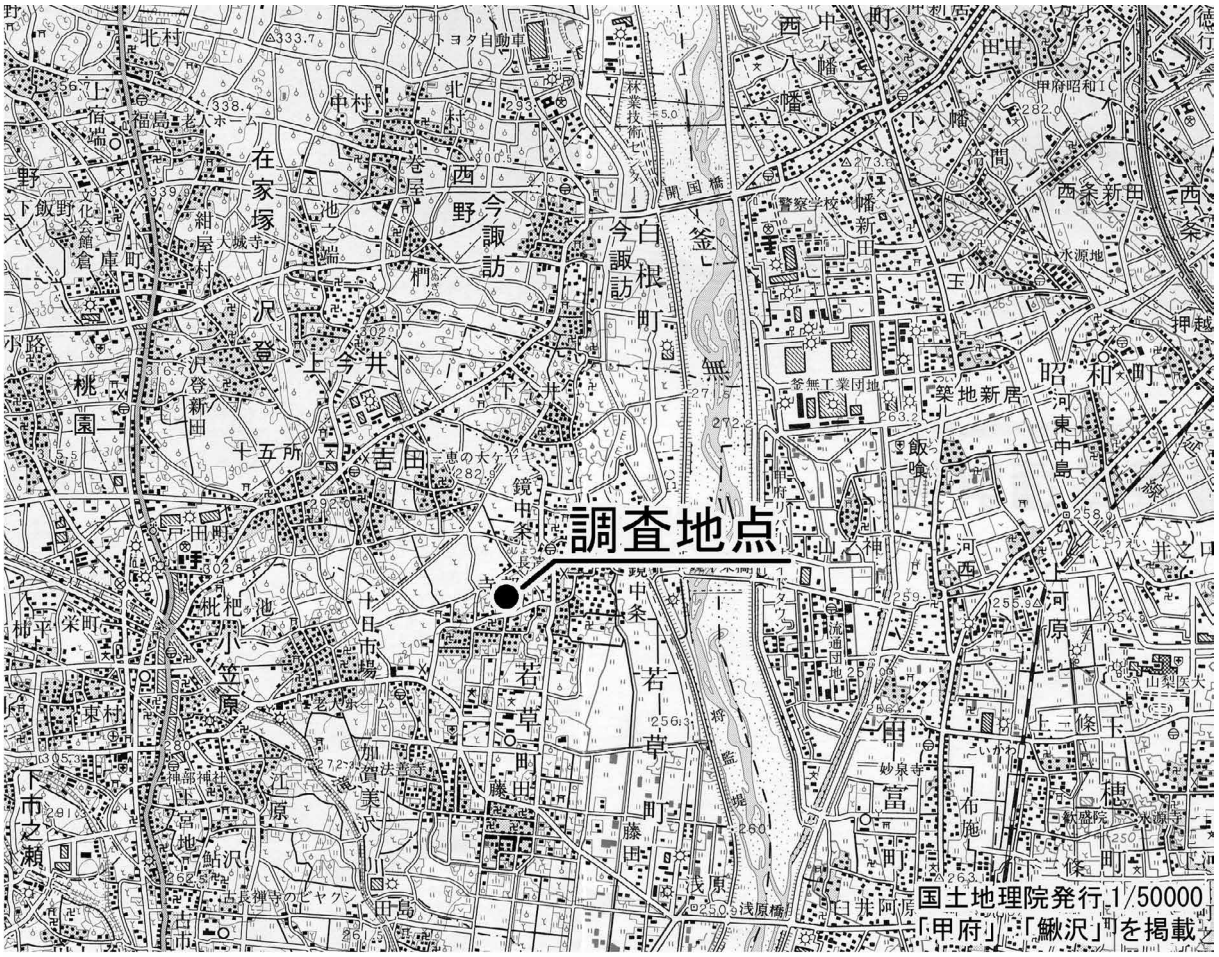
調査に際してはグリッド法を用い、調査予定地をカバーするように５ｍメッシュを基本とするグリッドを設定した。グリッドの原点は、ＧＰＳを用いた基準点測量に拠り、５ｍメッシュの南北線は国家座標Ⅷ系の南北ラインに沿うように設定した。

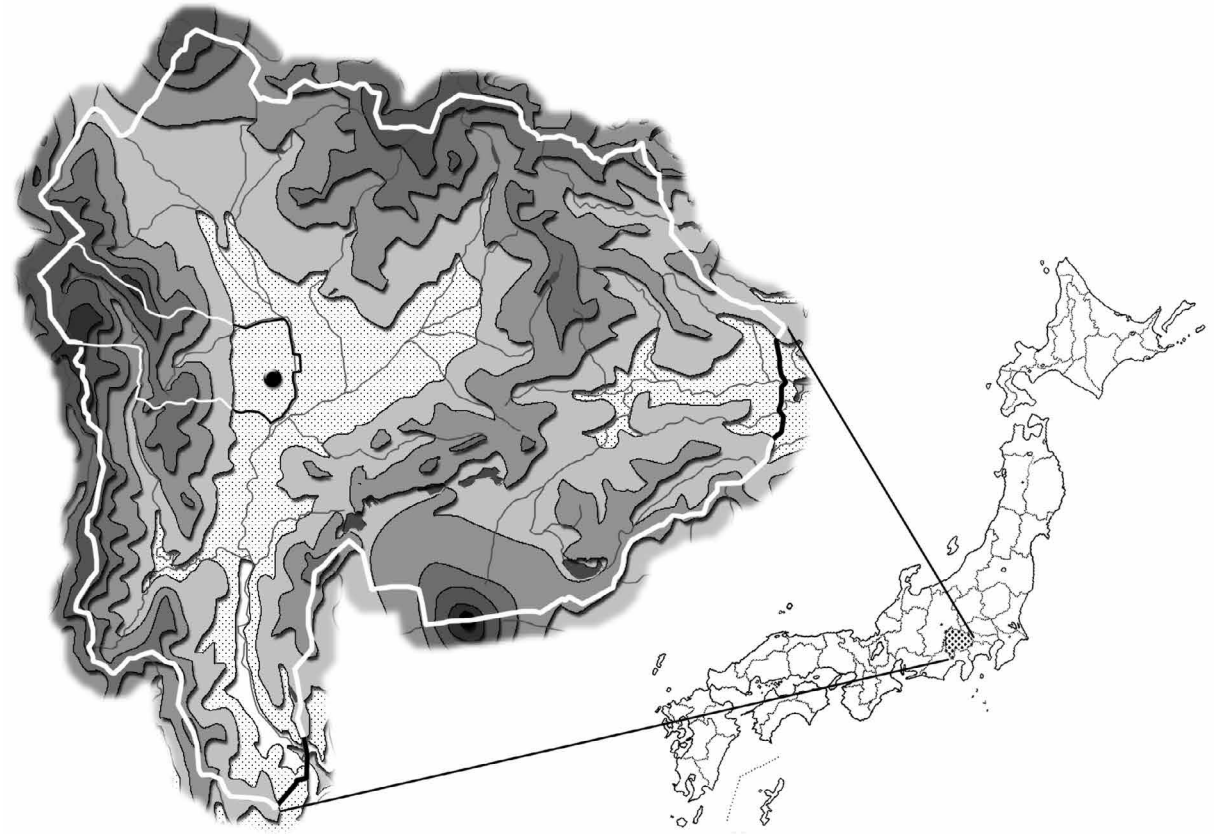
５ｍメッシュの各線（ライン）の名称は、南北に走る線を東から西にＡ・Ｂ・Ｃ・・・とアルファベットで、東西に走る線を北から南に１・２・３・・・と算用数字で表し、それぞれＡ－ライン、Ｂ－ライン、１－ライン、２－ラインなどと呼称した。またそれぞれのラインの交点を（西へ並ぶアルファベット）－（南へ並ぶ算用数字）のように表して、Ａ－１ポイント、Ｂ－２ポイントなどと呼称した。各区（スクエア）の名称はその区画の北東隅の名称をもってあてた。

調査はまず重機により表土を除去した後、人力により確認面を精査し、遺構確認作業を行った。表土から遺構確認面までの深さは概ね 0.7 ～ 0.9 m程であった。

遺構の表土除去に際しては、適宜セクションベルトを設定し、覆土の堆積状況を観察しながら行った。また、必要に応じてサブトレンチを設定した。遺構から出土した遺物については、ＳＫ０１においては、原則として全点出土位置を記録し、それ以外の遺構については遺構一括で遺物を取り上げた。

土層断面図は原則として断面図を１／20 で作成した。また、遺構平面図は平板測量により１／20 で作成した。調査区については、北東端に深堀トレンチを設置し、対象となった遺構面以下の状況について探査したが、洪水流に起因する堆積が卓越し、遺構･遺物の検出を見なかったため、今回の調査は、報告する遺構面一面の調査となった。





第１図　遺跡の位置

（２）調査の経過

以下に調査日誌（抄）を掲げ調査の経過を示す。

１月 23 日（金）晴～１月 24 日（土）晴　表土除去作業。遺構確認作業。24 日は重機のみ稼働。

１月 25 日（日）晴　休日作業なし。

１月 26 日（月）晴～１月 27 日（火）晴　表土除去作業。遺構確認作業。

１月 28 日（水）晴　表土除去作業は午前中で終了。遺構確認作業を続行。遺構の切り合い状況確認のためサブトレンチを設定し掘削を開始する。調査区西端に排土溝兼深堀トレンチを設定し、確認面下の状況を把握する。同写真撮影。確認面以下に安定した土層はみられない。

１月 29 日（木）晴～１月 30 日（金）晴　サブトレンチの新規設定。同掘削開始。ＳＥ０２の掘削。

１月 31 日（土）晴～２月１日（日）晴　休日作業なし。

２月２日（月）雨　サブトレンチでの確認作業続行。調査区南端部分で一部本格的に遺構覆土の除去を開始する。雨天のため午前中で作業中止。

２月３日（火）晴　ＳＤ０１～０３掘削開始。サブトレンチ掘削続行。

２月４日（水）晴　ＳＫ０１・ＳＥ０１にからむ新たなサブトレンチを掘削開始。ＳＤ０１～０３の表土除去を調査区北端、南端両方から続行。

２月５日（木）晴～２月６日（金）晴　先日の作業続行。

２月７日（土）晴～２月８日（日）晴　休日作業なし。

２月９日（月）晴～２月 10 日（火）晴　先日の作業に加えＳＫ０１の調査を開始。

２月 11 日（水）晴　祝日作業無し。

２月 12 日（木）晴～２月 13 日（金）晴　遺構の掘削続行。

２月 14 日（土）晴～２月 15 日（日）晴　休日作業なし。

２月 16 日（月）晴　遺構の掘削続行。

２月 17 日（火）晴　ＳＥ０１覆土半裁完了。セクション写真撮影。その他遺構掘削続行。

２月 18 日（水）晴　ＳＥ０１セクションベルト除去掘削続行。その他遺構掘削続行。

２月 19 日（木）晴　ＳＥ０１完掘。同測量図の作成及び写真撮影。

２月 20 日（金）晴　遺構の掘削続行。

２月 21 日（土）晴　午後半日作業。ＳＥ０２掘削、同測量図作成。

２月 22 日（日）晴　休日作業なし。

２月 23 日（月）晴　遺構の掘削続行。

２月 24 日（火）晴～２月 25 日（水）晴　遺構の掘削に平行して基準点測量。調査区平面図作成。

２月 26 日（木）晴　遺構掘削を同日ほぼ完了。

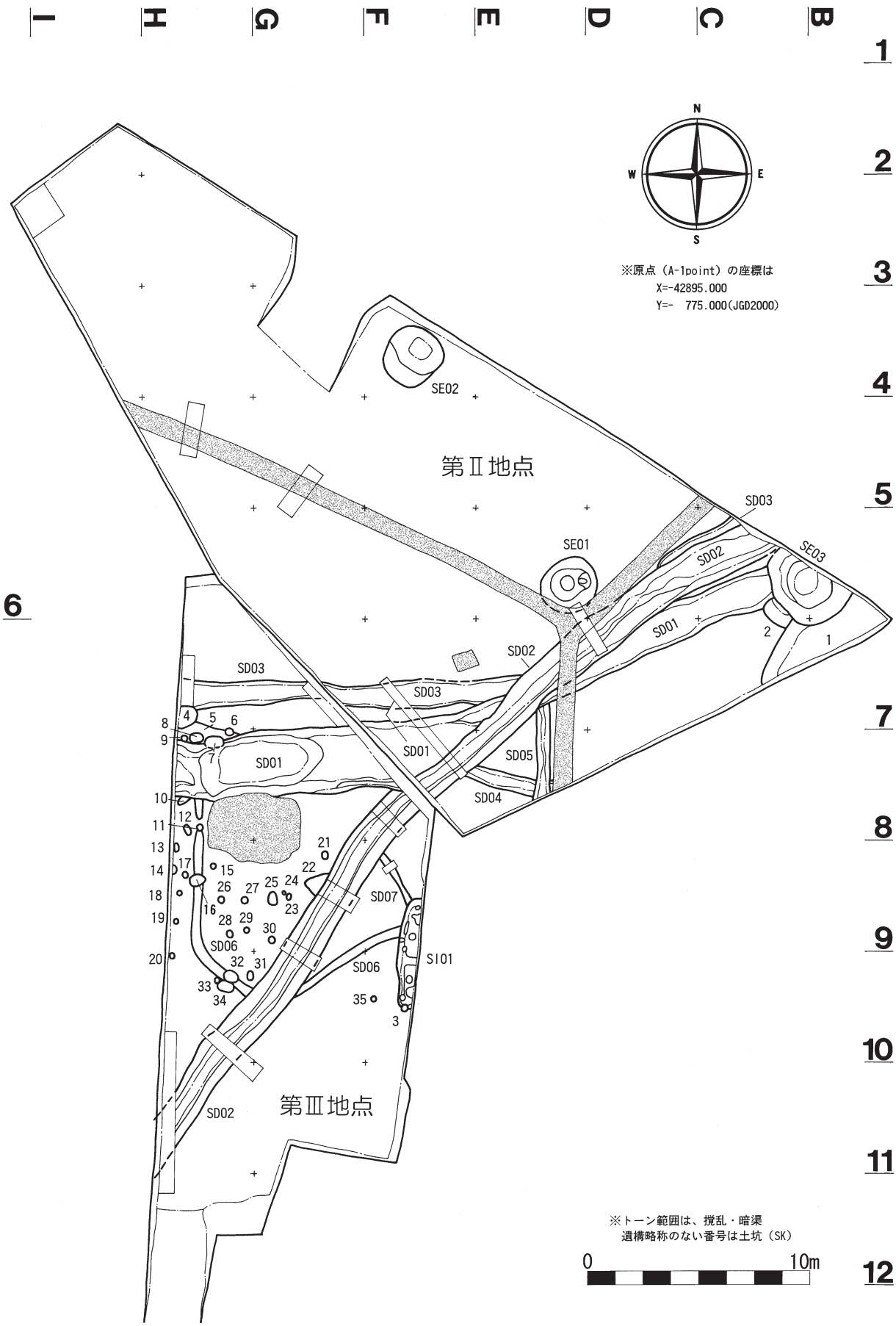
２月 27 日（金）晴～２月 29 日（日）晴　休日作業なし。27 日は臨時休業（担当者研修のため）。

３月１日（月）晴　遺構掘削、清掃、調査区水準測量。

３月２日（火）晴　調査区壁断面図、溝の測量図作成、同写真撮影。

３月３日（水）晴　撤収作業。

第２図　調査区の位置と配置



第３図　調査区全体測量図

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の立地

本遺跡は、平成 15 年４月１日、山梨県の釜無川右岸地域６町村が合併して誕生した南アルプス市に立地する。市の総面積 264.06 平方ｋｍ、領域は東西 29.6 ｋｍ、南北 11.8 ｋｍの範囲に広がり、山梨県の総面積の約 5.9% を占める。市の領域は甲府盆地における釜無川（富士川）右岸地域のほぼ全てを占めるが、市の東端は釜無川（富士川）左岸に占地する市域の飛地部分にあり、西端は、大仙丈ケ岳（2975 m）であり長野県に接する。市の北端は、駒津峰（2752 m）付近で、南端は、釜無川に滝沢川、坪川等が合流する地点となる。

上記したように市の領域は甲府盆地における釜無川（富士川）右岸地域のほぼ全てを占めるが、これは、概ね山梨県の最西部、所謂峡西（きょうさい）地域、西郡（にしごおり）地方などと呼称されてきた地域に相当し、町村合併以前より地形的にも文化的にも一体的に捉えられてきた地域といえる。

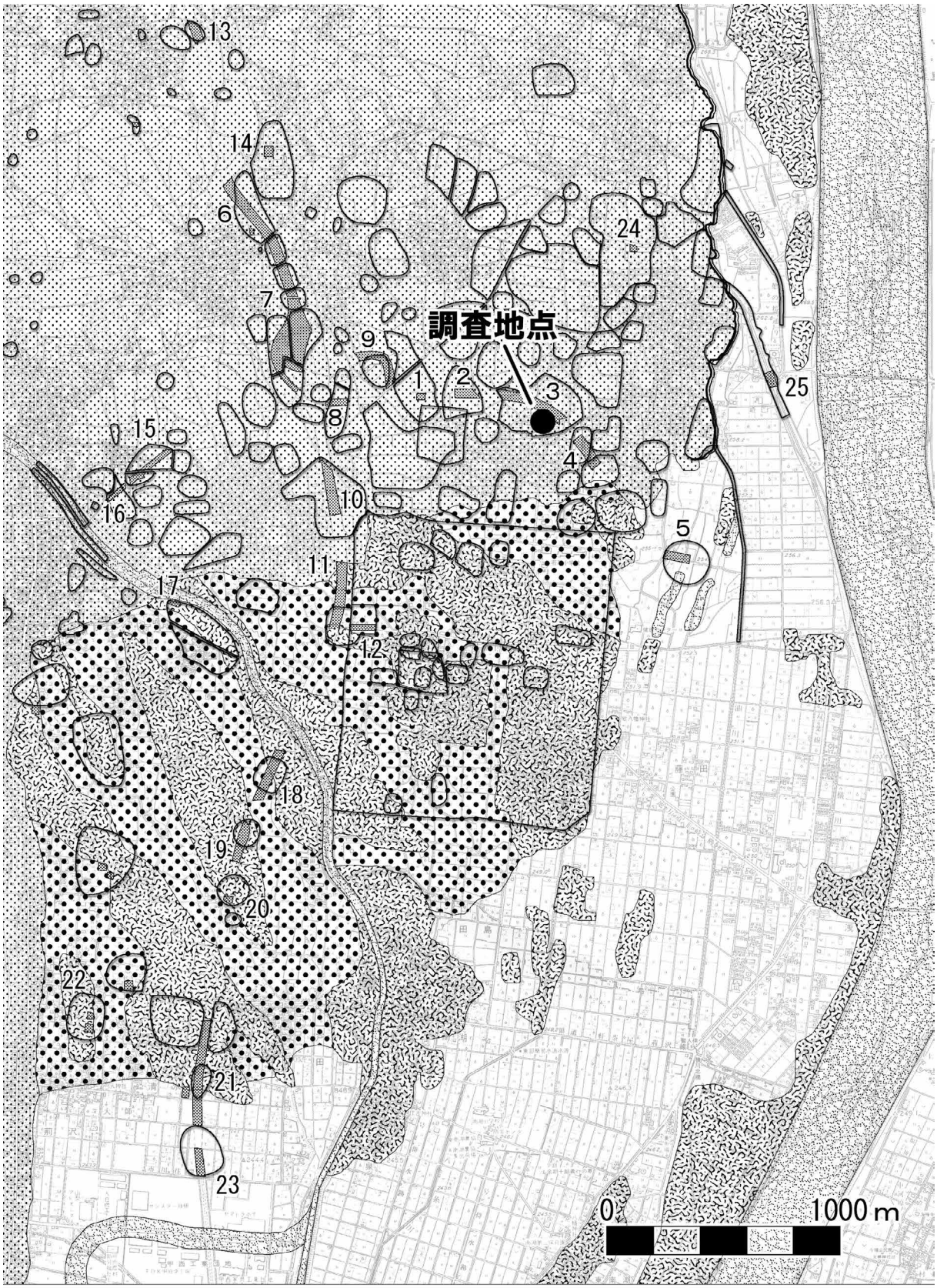
市域西部は、国内第２位の標高 (3193 m) を誇る南アルプス連峰（赤石山脈）の主峰北岳を擁し、その前衛である巨摩山地を含め急峻な山岳が卓越する。また、櫛形山を中心とした巨摩山地と南アルプス連峰との間には、所謂「糸魚川 - 静岡構造線」が市域を縦断する。

市域東半は、これら急峻な山岳を流下してきた河川の営為によって形成された複合扇状地が発達する。その中でも、御勅使川の河川作用によって形成された御勅使川扇状地は、日本有数の扇状地として著名である。市域の東辺は一部対岸に飛地を有するが、概ね釜無川に画され、これら巨摩山地由来の複合扇状地群が到達し得なかった市域南東辺には、釜無川の氾濫原がひろがっている。

寺部村附第６遺跡は、第４図に示すとおり、御勅使川扇状地上に占地する。御勅使川扇状地では、その扇端部分の湧水線に沿って帯状に埋蔵文化財包蔵地が分布することが知られている。これら御勅使川扇端遺跡群を微視的に見れば御勅使川扇状地の最末端においては、古墳時代後期・奈良平安時代を中心とする集落に伴って腰帯具などが検出された新居道下遺跡（10、以下遺跡名のあとに付した番号は第４図に示した遺跡の位置に対応する）、弥生時代中期、後期及び古墳時代後期～中世に係る遺構・遺物が検出された溝呂木道上第５遺跡（16）・枇杷Ｂ遺跡（15）、溝呂木道上第５遺跡から滝沢川を隔て南側に占地する向第１遺跡（17）などが発掘調査され、弥生時代中期以降中世まで、連綿と人間の営為の痕跡が検出され、扇状地末端部の湧水帯に支えられた豊かな住環境を想像することが出来る。

御勅使川扇状地扇端の範疇で捉えうる遺跡群でもやや内側（扇央）に入ると古墳時代前期及び平安時代の集落が発見された村前東Ａ遺跡（７）･角力場第２遺跡（８）、寺部村附第 12 遺跡（２）などがあり、この辺りに古墳時代前期の遺構が濃密且つ広汎に分布することが明らかになりつつある。

またこの領域については、平安時代９世紀半ば以降、古墳時代前期以来断絶していた集落が再出現する傾向があり、例えば八ヶ岳山麓における平安時代前半の集落動向に見られるような該期の汎甲斐国的開墾指向の高揚といった潮流と期を一にした動向が見て取れるなど、前記領域とは様相が異なり、古墳時代前期および平安時代前半の遺跡が卓越する地域といえる。ここが、この地域でいうところの「田方」と「原方」の境界域にあたり、これより北側は、古来から「月夜でも焼ける」と称された御勅使川扇状



凡 例：

河道
旧河道

御勅使川扇状地及び
市之瀬台地麓複合扇状地

釜無川氾濫原

氾濫原上や
扇状地上の微高地

滝沢川扇状地

第４図　遺跡の立地と周辺の調査

地扇央の旱魃地帯、所謂「原七郷（はらしちごう）」となる。

本遺跡は御勅使川扇状地上、扇端から約 400 ～ 600 m程扇央寄りに位置し、微視的に見れば、御勅使川扇状地扇端部の遺跡群の中でも内側（扇央）の分布領域範疇として捉えうる。この領域においては、今回検出された平安時代後半以降の遺構、遺物について、これまであまり検出例がなかったが、本遺跡と同様、現在の寺部集落に北接する寺部村附第 12 遺跡において若干の住居址、竪穴状遺構等が検出されているほか、今回寺部村附第６遺跡において、（第Ⅰ～第Ⅲ地点を通じて）一定の規模で該期の遺構が検出されたことにより、やはり通例いわれているとおり、時期が下るにつれて、遺構分布が現在の集落領域に近づく傾向がみてとれる。

本遺跡周辺を含む御勅使川扇状地末端部は、『和名抄』に所載の甲斐国巨麻郡九郷のうちの大井郷に比定される。御勅使川扇状地末端の湧水帯に位置する遺跡群の南面に広がる滝沢川扇状地上には条里地割が広く遺存し、12 世紀代にはこの条里地域を中心に加賀美荘が成立して甲斐源氏加賀美氏が拠ったといわれる。滝沢川扇状地上の微高地に現在も占地する「法善寺」は、加賀美氏館跡と伝えられ、加賀美氏はここを拠点に峡西・峡南地方に勢力をもったとされる。滝沢川扇状地上では、法善寺の塔頭であった「福寿院」関連の遺構が検出された二本柳遺跡（11 ～ 12）が調査されている。二本柳遺跡では特に、甲西バイパス地点（11）から、古代末から近世の水田址などと共に、中世の木棺が良好な状況で検出され、当時の葬送儀礼を検証する上で貴重な事例となった。

遺跡の位置する南アルプス市寺部は、近世村落では寺部村にあたる。寺部村は、検地帳によれば慶長検地時点での石高 525 石６升、耕地面積は田３町余り、畑 13 町余り、荒地 16 町余りで、やはり扇央の旱魃地帯に近いその立地から、畑地の割合及び荒地の割合が相対的に高いことが特徴とされる。本遺跡周辺も、現在は畑地灌漑設備の整備により果樹栽培が盛行するが、それ以前は専ら綿花、煙草、桑などの栽培が行われてきたものと推察される。

第２節　調査区の土層

遺跡の現況は桃畑であった。調査区において確認された基本土層は以下のとおりである。

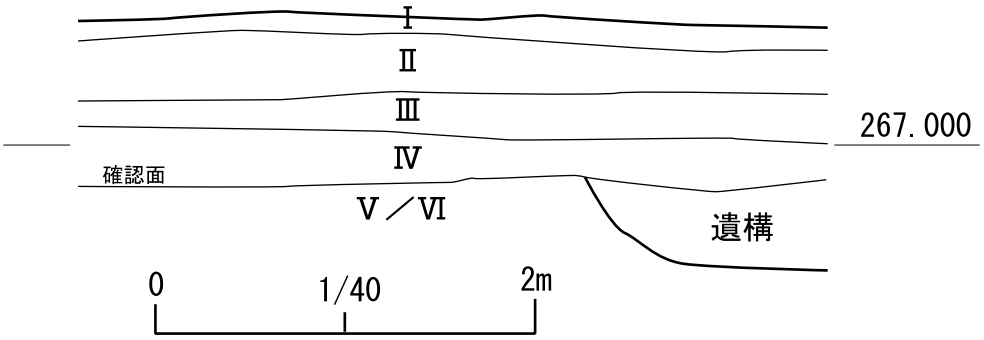
第Ⅰ層　表土。灰褐色土。砂礫を多く含みしまらない。

第Ⅱ層　褐色土。砂礫を多く含む。

第Ⅲ層　黒褐色土。砂礫を多く含む。

第Ⅳ層　暗褐色土。砂礫を多く含む。本層下面が以降確認面となる。

第Ⅴ／Ⅵ層　黄褐色粘土層（Ⅴ）だが、調査区西側に行くほど、砂礫層（Ⅵ）が勝るようになる。



第５図　調査区の土層

第Ⅲ章　検出された遺構と遺物

第１節　溝（ＳＤ）

ＳＤ０１

主軸は、調査区南端付近でＮ -80°- Ｅを採った後、北半でＮ -66°- Ｅに屈曲し、調査区を横断する。両端は調査区外にあり検出し得ない。ＳＤ０２、ＳＤ０５、ＳＥ０３、ＳＫ０２を切り、ＳＤ０３と切りあう。遺構確認面において検出された幅は 1.51 ～ 3.15 m、深さは 0.48 ～ 0.52 m。断面形はＵ文字状を呈し、底面に平坦面を有する。底面標高は、調査区北端において 266.06 m、C-C' 断面において 266.14 m、調査区南端において 266.30 mとなり、今回の調査区内に限れば現地形に反し北側に向かって傾斜する傾向が看取される。覆土は、黒褐色土を主体とする自然堆積である。

遺物は、覆土から土師質土器片、青磁片、陶器片、石製品片等が検出されたが、小片が多く図示し得たのは第 12 図（１・５～９）に示した６点に留まる。ただし、遺物番号７・９として図示した擂鉢および砥石かと見られる石製品は、ＳＤ０１、０２の新旧関係を確認するために設けたサブトレンチ内からの出土であり、ＳＤ０２に帰属する可能性もある。

ＳＤ０２

主軸は、調査区内で検出された範囲では、概ねＮ -50°- Ｅを採り調査区を横断する。両端は調査区外にあり検出し得ない。ＳＤ０１・ＳＤ０３に切られ、ＳＤ０４、ＳＤ０５、ＳＥ０３を切る。遺構確認面において検出された幅は 1.30 ～ 1.84 m、深さは 0.80 ～ 1.08 m。断面形は緩やかなＶ文字状を呈し、底面標高は、調査区北端において 265.80 m、C-C' 断面において 265.63 m、調査区南端において 265.70 mとなり今回の調査区内に限れば南側に向かって若干の傾斜が看取される。覆土は褐色土を主体とする自然堆積で、底面付近は粘質土と礫の混和層が堆積する。

遺物は覆土から、土師質土器片、陶器片などが若干検出されたが、いずれも小片であり図示し得なかった。

ＳＤ０３

主軸は、ＳＤ０１にほぼ平行し、調査区南端付近でＮ -80°- Ｅを採った後、北半でＮ -66°- Ｅに屈曲する。両端は調査区外にあり検出し得ない。ＳＤ０１と切りあい、ＳＤ０２を切る。遺構確認面において検出された幅は 0.86 ～ 1.27 m、深さは 0.10 ～ 0.20 m。断面形はＵ文字状を呈し底面標高は調査区北端で 266.38 m、南端で 266.65 mとなり、今回の調査区内に限れば現地形に反し北側に向かって傾斜する傾向が看取される。覆土は、黒褐色粘質土と拳大の亜円礫の混和層に占められる。

遺物は、覆土から 11 世紀後半～ 15 世紀の所産となる土師質土器片がわずかに検出されたが、小片が多く図示し得たのは第 12 図（２～４）に示した３点に留まる。

ＳＤ０４

Ｄ－７区において検出された。主軸は、調査区内で検出された範囲では、概ねＮ -75°- Ｗを採る。ＳＤ０２に切られ、ＳＤ０５と切りあう。調査区内で検出された長さは、約 4.0 m、幅は 0.50 ～ 0.73 mを測る。断面はＵ字状を呈し、検出された深さは 0.2 m程で、e-e' 断面における底面標高は 266.53 m。

検出された範囲で顕著な傾斜は認められない。覆土は、黒褐色土に占められる。

遺物は、土師質土器片２点が検出されたがいずれも小片で図示し得ない。

ＳＤ０５

Ｄ－６区からＤ－７区において検出された。ＳＤ０１、ＳＤ０２に切られ、ＳＤ０４と切りあう。主軸は、調査区内で検出された範囲では、概ね真北を採る。調査区内で検出された長さは、約 4.3 m、幅は 0.53 ～ 0.87 mを測る。断面はＶ文字状を呈し、検出された深さは 0.2 m、底面標高は 266.45 m程で、検出された範囲で顕著な傾斜は認められない。覆土は黒褐色土に占められる。

遺物は検出されなかった。

第２節　土坑（ＳＫ）

ＳＫ０１

調査区東端、Ｂ－６ポイント周辺において検出された。ＳＫ０２、ＳＥ０３に切られる。当初、竪穴住居址と考えたが、周壁の立ち上がりが、通有の竪穴住居址に比して緩やかなこと、底面に貼床や硬化面等、住居址床面と類推しうる所見が得られなかったこと、炉址や焼土範囲も見られず、遺構自体の大部分が調査区外にあるため、遺構形状を明らかにできないことなどから、竪穴住居址とする根拠が希薄であるので土坑とした。

底面は概ね平坦だが、上記した通り、貼床や硬化面は見られない。周壁は緩やかに立ち上がる。確認面から床面までの深さは、0.36 mで、底面標高は 266.04 mを測る。覆土は自然堆積で７層に分けられる。

遺物は、覆土中及び底面より弥生時代後期～古墳時代前期の所産となる遺物が検出された。第 10・11 図に６点を図示した。このうち１・２は底面から、それ以外の遺物は底面から若干浮いた状態で検出された。

ＳＫ０２

Ｂ－５区において検出された。ＳＫ０１を切り、ＳＤ０１、ＳＥ０３に切られる。今回の調査では平面形状を明確にし得なかった。確認面からの深さは 0.21 m、確認し得た底面標高は 266.21 mを測る。

遺物は検出されなかった。

第３節　井戸址（ＳＥ）

ＳＥ０１

Ｄ－５区において検出され、近世以降の暗渠に切られる。遺構南半分を撹乱されるため明確な形状は不明だが、確認面における値で短径 2.38 m、長径 2.60 m程の楕円形を呈するものと推察される。確認された深さは 1.80 m、底面標高は 264.96 mである。擂鉢状の断面形を呈し、底面には径 0.63 m、高さ 0.15 mを測る曲物が据えられる。曲物自体は非常に脆弱となっており、今回の調査で採取することはできなかった。東壁中位にピットを有し、擂鉢状の断面形を呈するこのピットの底面標高は、265.40 m程を測る。覆土は曲物の掘方を除き 15 層に分けられ、覆土中に間層を置いて２層にわたり拳大の亜円礫層が確認できる。

遺物は、平安時代後半の所産となる土師器の底部を２個体図示した。この他に同時期の所産となる土師器片１片が検出された。遺物はすべて覆土からの出土であった。

ＳＥ０２

Ｅ－３区において切り合いなく単独で検出された。確認面における規模は、短径 2.55 m、長径 2.75 m程の円形を呈するが、平面形の南西１／４程は、深さ 0.12 m程の浅い皿上の落込みに占められる。確認された深さは 1.14 m、底面標高は 265.92 mである。底面は、長辺 1.0 m、短辺 0.8 m程の不正な隅丸長方形を呈す。覆土は 11 層に分けられ、遺構がある程度埋没した段階で、拳大の亜円礫層を主体とする土層が確認される。

遺物は、渥美産と推察される陶器甕片２点が覆土中より検出された。

ＳＥ０３

調査区東端付近、Ａ・Ｂ－５区において検出された。ＳＫ０１、ＳＫ０２を切り、ＳＤ０１・０２に切られる。平面形は、本址北東半は調査区外にあるため明らかにし得ないが、概ね円形を呈するものと推察される。断面形は、いくつかの段を持ちながら緩やかに擂鉢状に立ち上がる。確認し得た深さは、調査区北壁における計測で 1.03 m､底面標高は 265.54 mを測る。覆土は自然堆積で６層に分けられる。

遺物は、土師質土器片、陶器片等が検出されたが、いずれも小片であり図示し得なかった。

第Ⅳ章　総括

今回の調査では、複雑に切りあう溝５条、井戸址３基、土坑２基を検出した。

遺構の切り合い関係と各々の遺構のプランの確認（切り分け）に苦慮し、検出過程で各遺構ごとの遺物を分離しがたかったこと、また各遺構に相対的に幅広い時期の遺物が混入すること、また押並べて小片で数も少なく、溝や井戸といった遺構の性格からも遺構の時期決定には非常に苦慮した。

このような中、検出された遺構のうち、ＳＫ０１とした遺構以外は、前章に示したとおり、概ね 11 ～ 15 世紀の範疇で捕らえることができる。

ＳＫ０１については、弥生時代後期～古墳時代前期の所産といえる。第Ⅱ章にも記載したとおり、本遺跡の立地する御勅使川扇状地末端で行われた発掘調査については、そのほとんどの遺跡において該期の遺構・遺物が検出されており、御勅使川扇状地末端部における該期の遺跡の非常に広範な分布が改めて確認できたことになる。

このほか、調査の結果考察される本遺跡の総括は、今回の調査地点に南接して調査を実施した同遺跡第Ⅲ地点の発掘調査報告書（2005 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書第６集）に一括して記載する。

参考引用文献

清水　博　1998「枇杷Ｂ遺跡」『櫛形町文化財調査報告書』第 17 集

田中大輔　1998a「角力場第２遺跡」『若草町埋蔵文化財調査報告書』第１集

田中大輔　1998b「溝呂木道上第５遺跡」『若草町埋蔵文化財調査報告書』第２集

田中大輔　2001「寺部村附第 12 遺跡」『山梨考古』第 76 号山梨県考古学協会

田中大輔　2002「向第１遺跡」『若草町埋蔵文化財調査報告書』第３集

田中大輔　2003「溝呂木道上第５遺跡（第Ⅱ地点）」『若草町埋蔵文化財調査報告書』第４集

中山誠二　2000「二本柳遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第 183 集

中山誠二　2000「二本柳遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第 183 集

新津　健ほか　1990「大輪寺東遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告』第 53 集

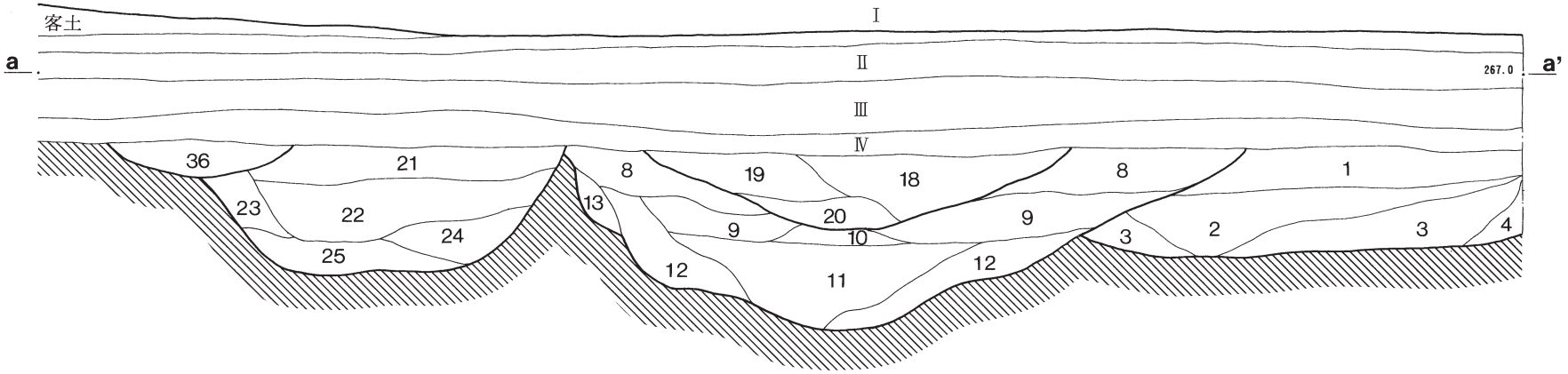
新津　健ほか　1992「二本柳遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告』第 72 集

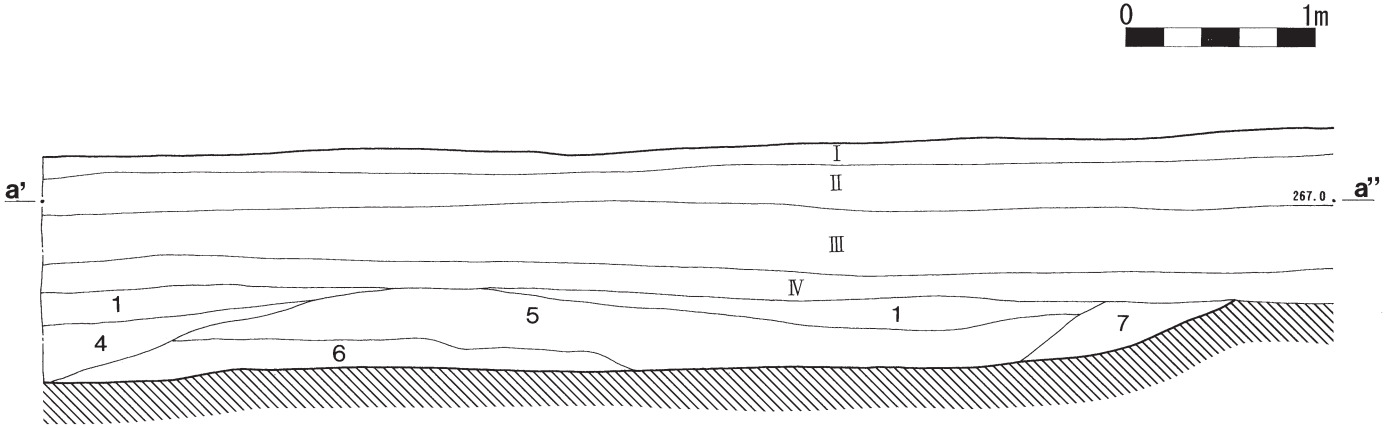
降矢哲男・佐々木満・山下孝司　2001「山梨県における中世の土器様相について―土師器皿を中心にして―」『中世土器研究論集―中世土器研究会 20 周年記念論集―』

三田村美彦他　1999「村前東Ａ遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第 157 集

宮沢公雄　2004「寺部村附第６遺跡」『南アルプス市埋蔵文化財調査報告書』第２集

米田明訓　1998「新居道下遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書』第 147 集





土層説明

ＳＫ０１

1　黒褐色土。砂礫含む。
2　褐色土。砂礫多く含む。
3　暗褐色土。砂礫含む。
4　暗黄褐色土。
5　暗黄褐色。
6　暗黄褐色。第５層より色調暗い。
7　黄褐色土。

ＳＥ０３

8　黒褐色土。砂礫多く含む。
9　暗褐色土。砂礫多く含む。
10　黒褐色粘質土。黄褐色粘土ブロック含む。
11　黄褐色粘土。
12　暗黄褐色粘土。砂礫含む。
13　黄褐色粘土。砂礫含む。

ＳＤ０１

14　暗褐色土。砂礫含む。
15　褐色土。砂礫、黄褐色粘土ブロック含む。
16　暗褐色土。同層上面に所々焼土粒の堆積が認められる。
17　黒褐色土。砂礫含む。
18　暗褐色土。砂礫夥しく含む。
19　暗褐色土。砂礫含む。
20　明褐色土。

ＳＤ０２

21　褐色土。砂礫含む。
22　褐色土。砂礫多く含む。
23　褐色土。砂礫夥しく含む。
24　暗黄褐色土。
25　礫と暗横褐色土の混和層。
26　暗褐色土。締まらない。
27　暗黄褐色土。黒褐色粘土ブロック多く含む。
28　黄褐色粘質土。砂礫多く含む。
29　暗横褐色土。黒褐色粘土ブロック多く含む。
30　黒褐色粘質土。
31　暗褐色土。黄褐色粘土ブロック含む。
32　黄褐色粘質土。礫を多く含む。
33　黒褐色粘質土。
34　黒褐色粘質土。砂礫多く含み締まらない。
35　黄褐色粘土と砂礫の混和層。締まらない。

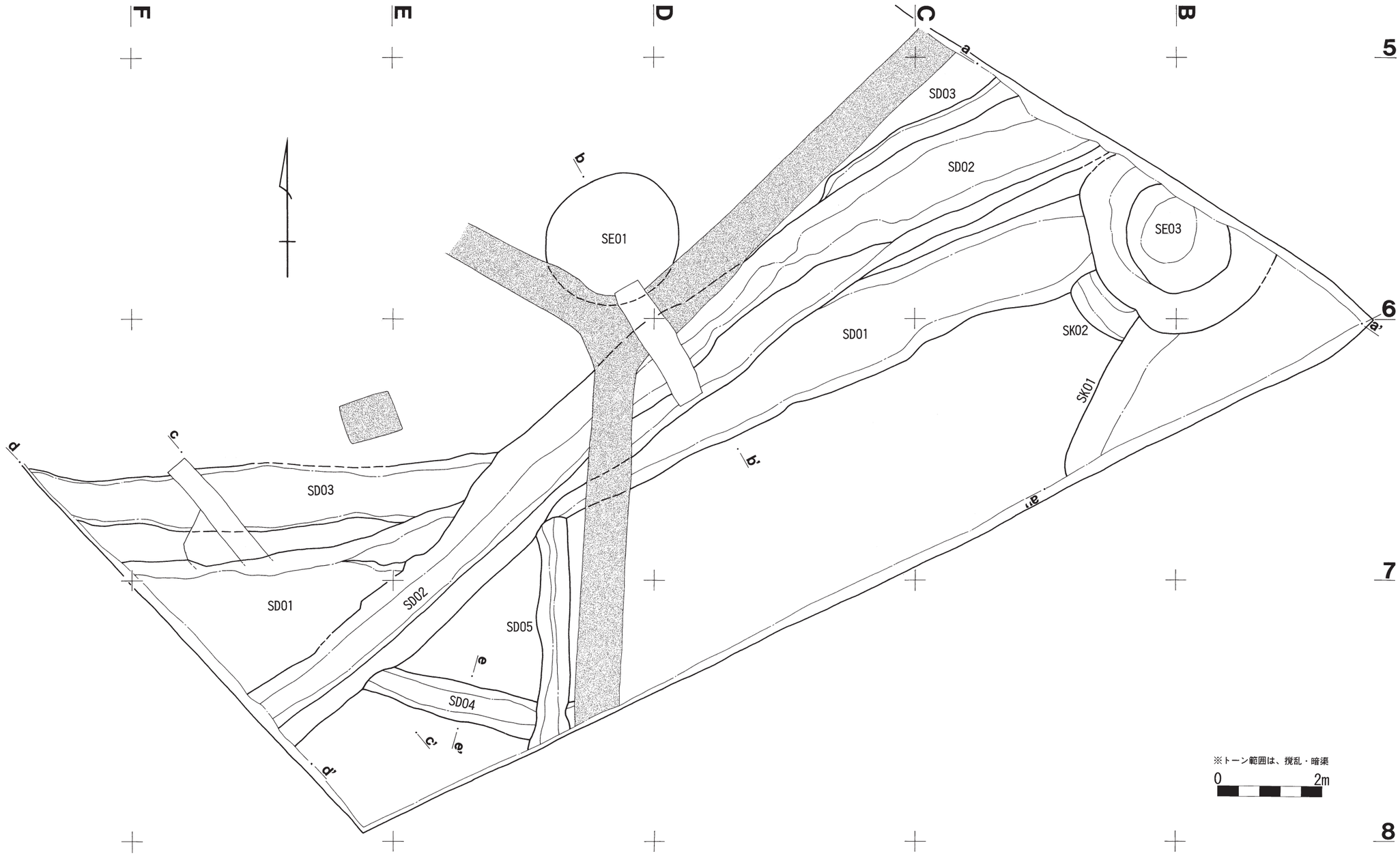
ＳＤ０３

36　黒褐色粘質土と径50㎜程の亜円礫の混和層。

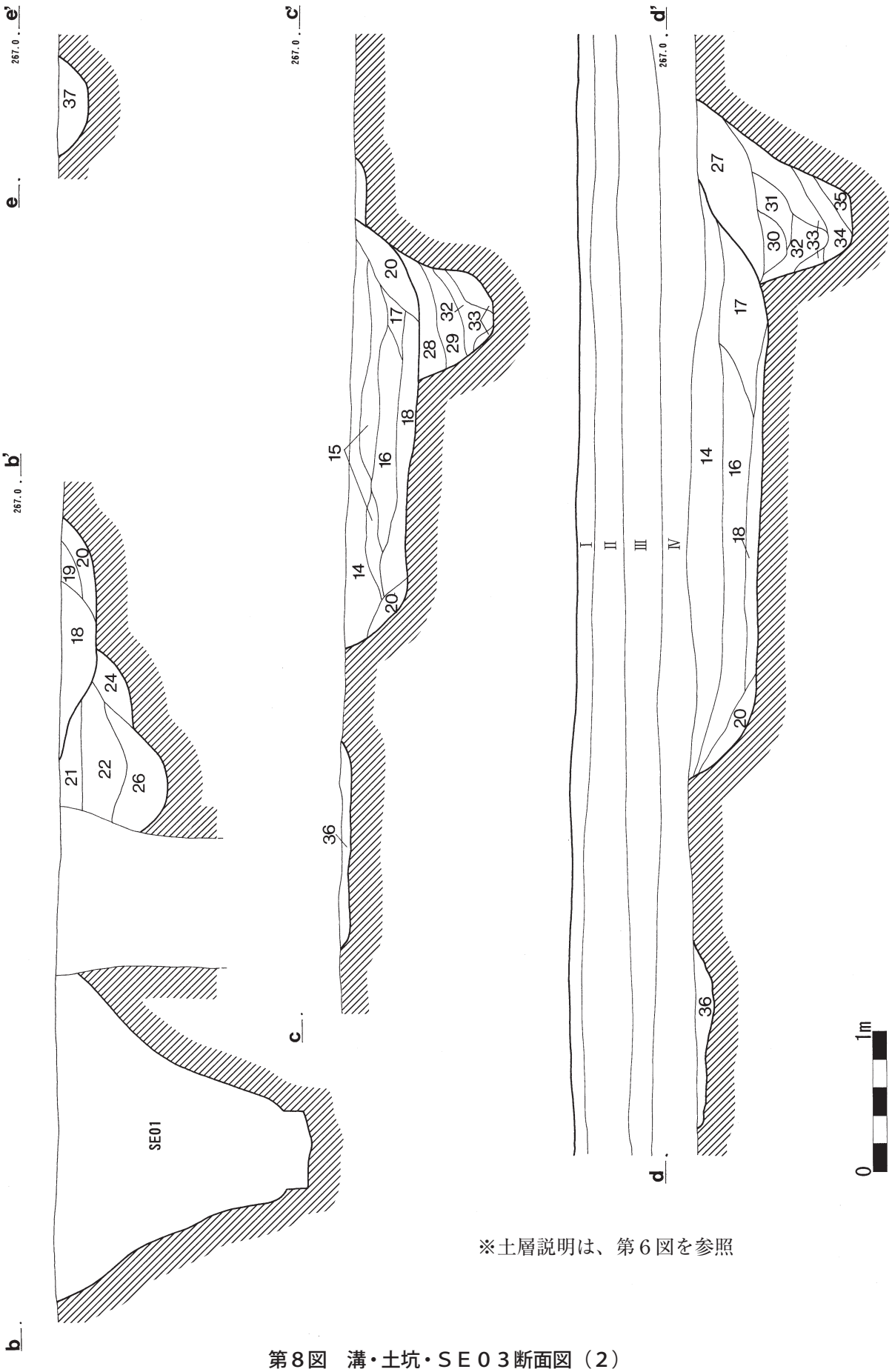
ＳＤ０４

37　黒褐色土。

第６図　溝・土坑・ＳＥ０３断面図（１）

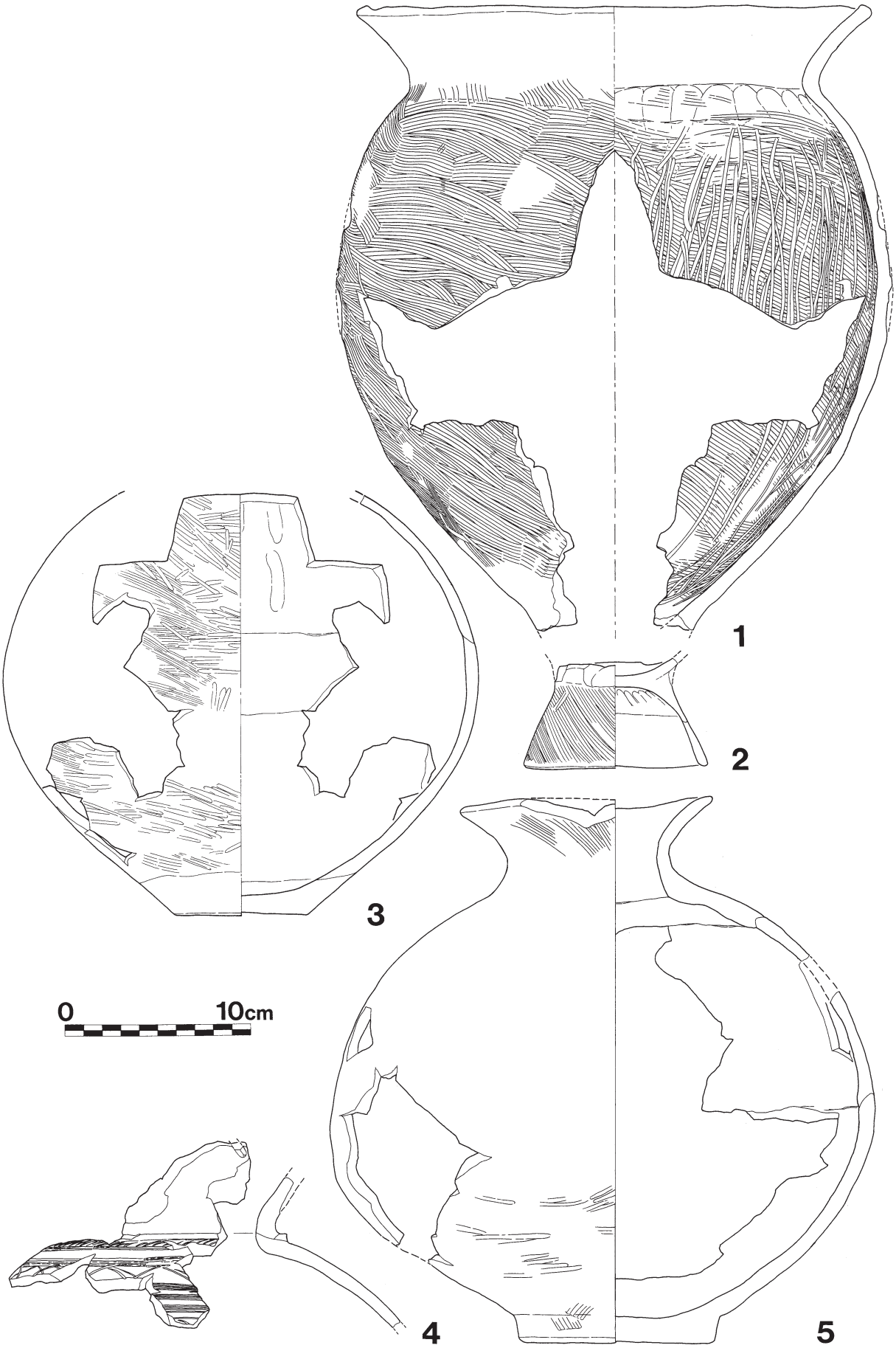


第７図　溝・土坑・ＳＥ０３平面図

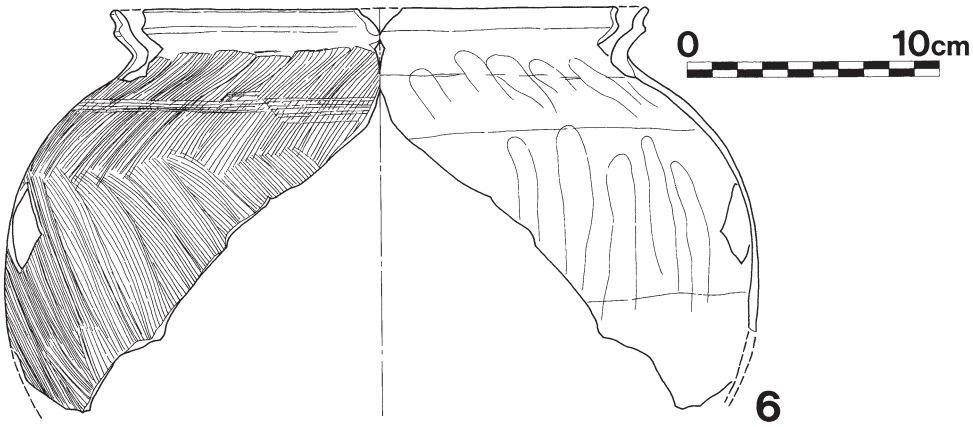


※土層説明は、第６図を参照

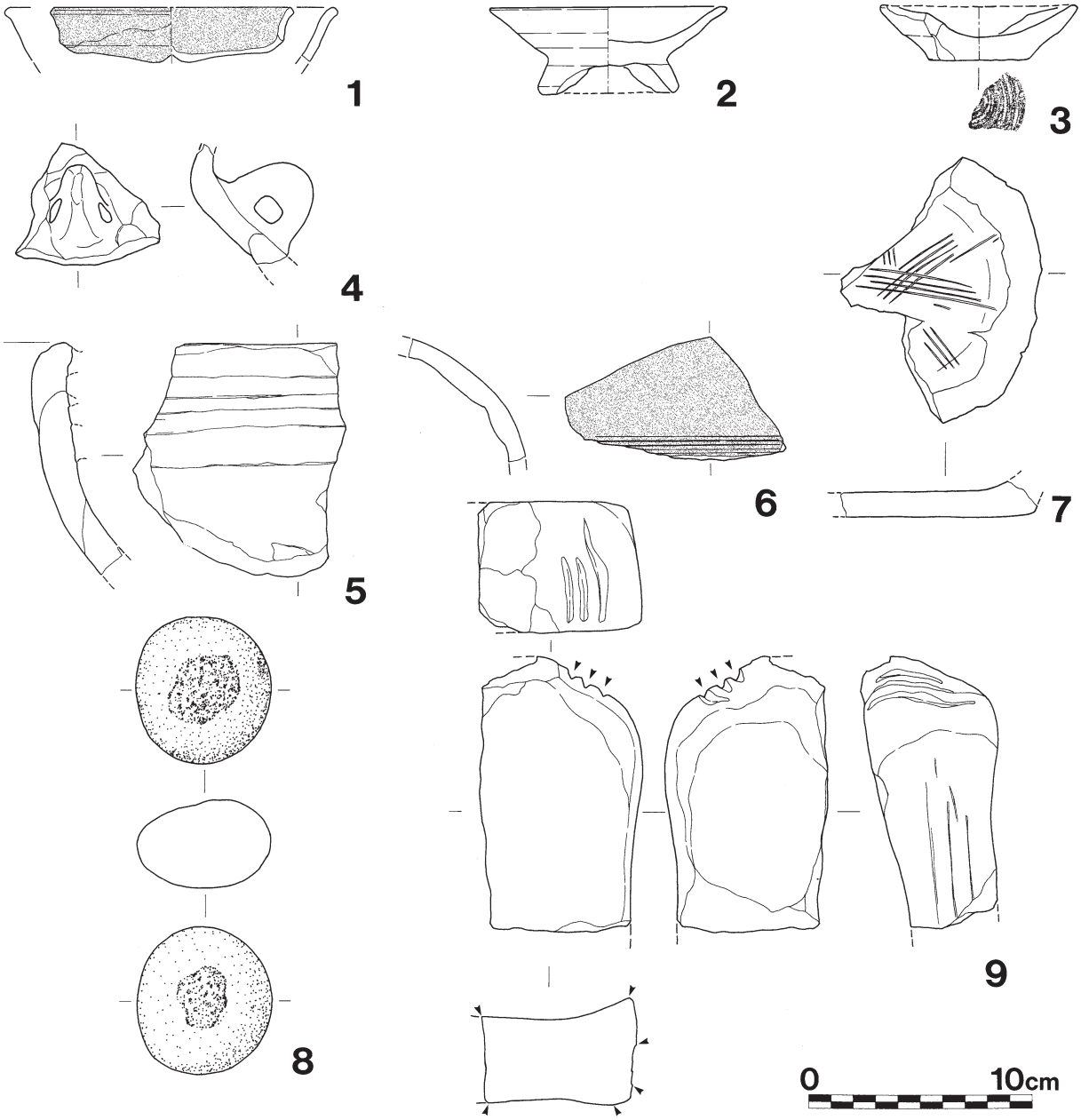
第８図　溝・土坑・ＳＥ０３断面図（２）



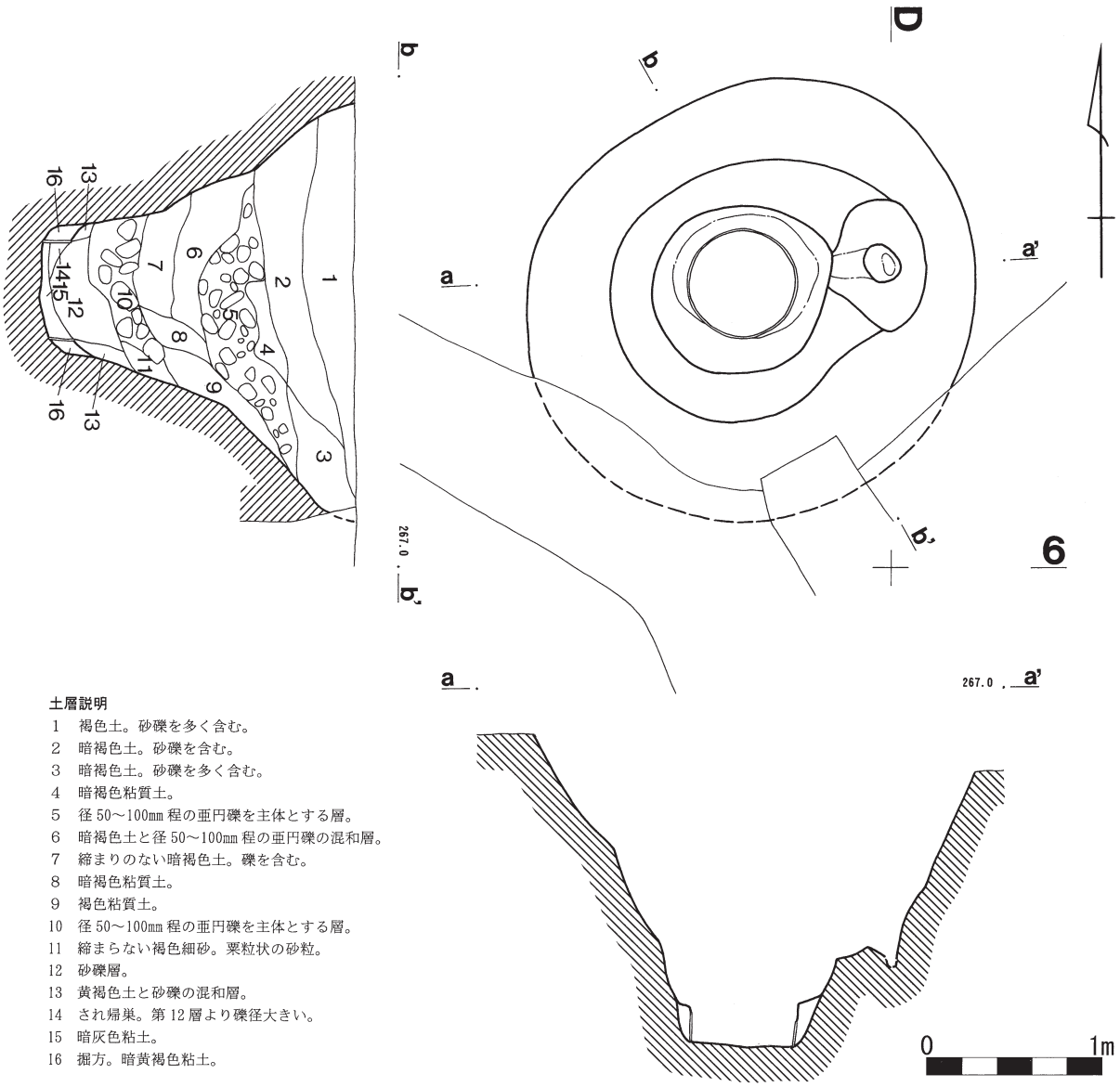
第９図　ＳＫ０１出土遺物（１）



第 10 図　ＳＫ０１出土遺物（２）



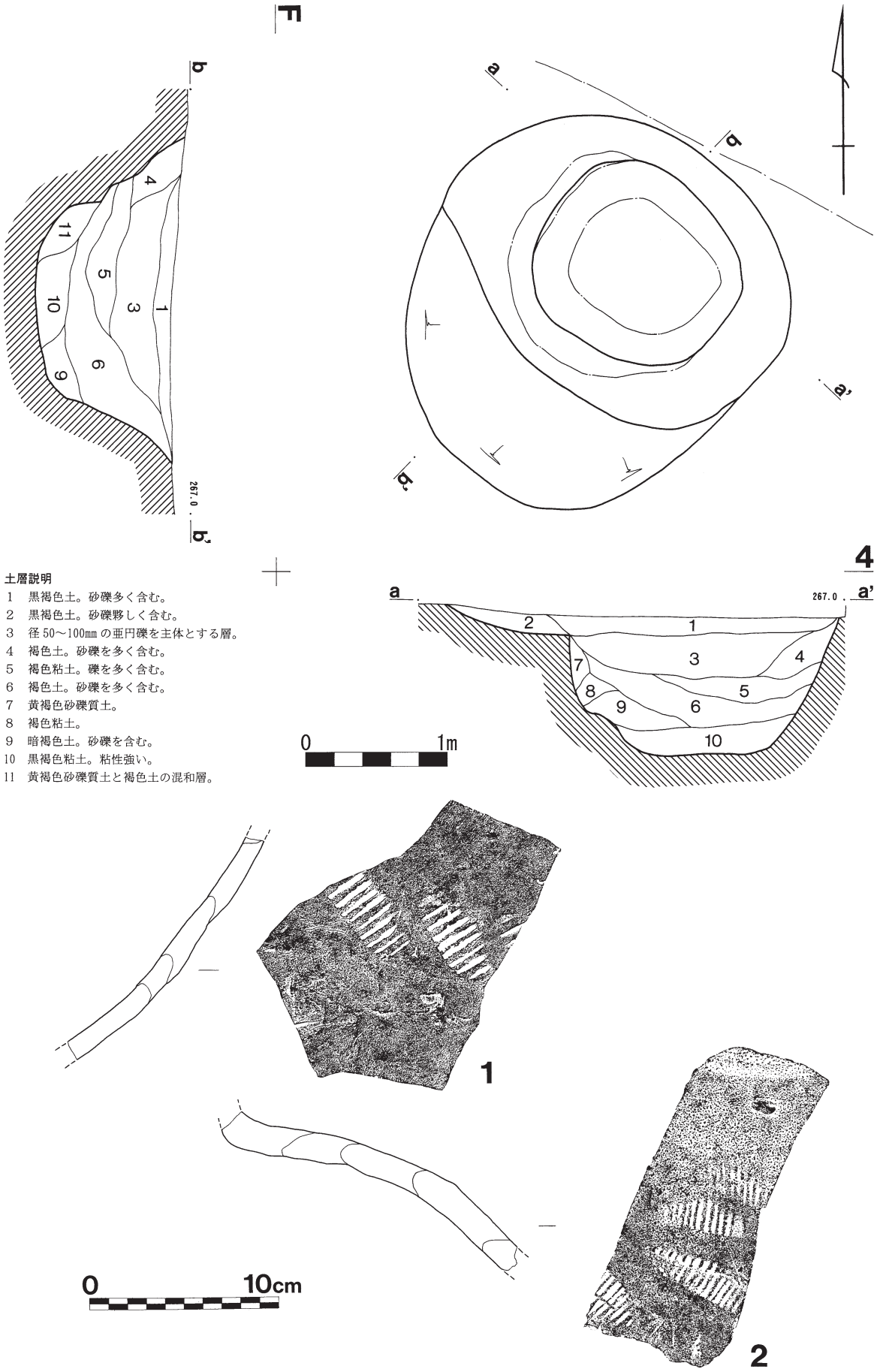
第 11 図　溝その他出土遺物



土層説明

1　褐色土。砂礫を多く含む。
2　暗褐色土。砂礫を含む。
3　暗褐色土。砂礫を多く含む。
4　暗褐色粘質土。
5　径 50～100mm 程の亜円礫を主体とする層。
6　暗褐色土と径 50～100mm 程の亜円礫の混和層。
7　締まりのない暗褐色土。礫を含む。
8　暗褐色粘質土。
9　褐色粘質土。
10　径 50～100mm 程の亜円礫を主体とする層。
11　締まらない褐色細砂。粟粒状の砂粒。
12　砂礫層。
13　黄褐色土と砂礫の混和層。
14　され帰巣。第 12 層より礫径大きい。
15　暗灰色粘土。
16　掘方。暗黄褐色粘土。

第 12 図　ＳＥ０１測量図・出土遺物



土層説明

1　黒褐色土。砂礫多く含む。
2　黒褐色土。砂礫夥しく含む。
3　径 50～100㎜ の亜円礫を主体とする層。
4　褐色土。砂礫を多く含む。
5　褐色粘土。礫を多く含む。
6　褐色土。砂礫を多く含む。
7　黄褐色砂礫質土。
8　褐色粘土。
9　暗褐色土。砂礫を含む。
10　黒褐色粘土。粘性強い。
11　黄褐色砂礫質土と褐色土の混和層。

第 13 図　ＳＥ０２測量図・出土遺物

挿図番号	遺物番号	種別	器形	計測値			残存率	色調	胎土	焼成	調整等	備考／出土位置等
				口径	底径	器高						
第9図	1	土器	甕	(26.5)	―	(33.6)	口～体部1／2	鈍い褐色	緻密	硬質	口縁部横ナデ外体部ヨコハケ内面ヨコハケ後縦方向にまばらなミガキ	ＳＫ０１
	2	土器	台付甕	―	9.7	(5.9)	脚部完存	橙色	やや粗。砂礫を多く含。	やや軟質	外面ななめ方向ハケ	ＳＫ０１
	3	土器	壷	―	(7.1)	(22.3)	体～底部1／4	鈍い黄橙色	やや粗。砂礫を多く含。	硬質	外面ヨコハケ後ミガキ 内面ナデ底面未調整	ＳＫ０１
	4	土器	壷	―	―	(10.0)	口～肩部破片	外：明赤褐色 内：明褐灰色	緻密	やや軟質	体部は凸帯下に斜行線文帯、直線文帯、山形文帯からなる。	ＳＫ０１
	5	土器	壷	13.1	9.8	29.1	全体の1／3	橙色	やや粗。砂礫を多く含。	軟質	外面ハケ後ナデか。器壁の剥離、摩滅が著しく観察し難い。底部未調整。	ＳＫ０１
第10図	6	土器	台付甕	(21.0)	―	(15.8)	口～体部1／3	鈍い黄橙色	粗。砂礫を多く含む。	硬質	口縁部ヨコナデ外体部ナナメハケ肩部ヨコハケ内面ナデ指頭圧痕顕著	ＳＫ０１
第11図	1	青磁	碗	(14.1)	―	(2.4)	口縁部1／4	釉：オリーブ灰色 胎：灰白色	緻密	硬質	ロクロナデ成形	ＳＤ０１
	2	土器	皿	(10.4)	(5.8)	3.8	全体の1／2	鈍い褐色	緻密。金色雲母多く含。	硬質	ロクロ成形 付高台	ＳＤ０３
	3	土器	皿	(8.4)	(4.4)	2.4	全体の1／4	鈍い橙色	緻密。金色雲母多く含。	硬質	ロクロ成形 底部回転糸切未調整	ＳＤ０３
	4	土器	茶釜	―	―	(5.4)	破片	浅黄橙色	緻密	軟質	ナデ調整後把手を接合。接合後穿孔	ＳＤ０３
	5	陶器	甕	―	―	(10.4)	破片	鈍い赤褐色	粗い砂礫多く含む。	硬質	ナデ整形 口縁部は剥離	ＳＤ０１ 常滑
	6	陶器	瓶子	―	―	(5.4)	破片	釉：オリーブ灰色 胎：灰白色	緻密。黒色粒子含む。	硬質	外面に灰釉。 肩部に櫛目文が横走	ＳＤ０１ 瀬戸美濃
	7	土器	擂鉢	―	―	(1.6)	破片	浅黄色	粗い砂礫多く含む。	硬質	底部未調整 櫛目の単位５単位以上	ＳＤ０１ ～０２
	8	石製品	敲石	Ｌ 6.4	Ｗ 5.9	Ｄ 3.8	完存	灰白色			両面中央に敲面	ＳＤ０１
	9	石製品	砥石か	Ｌ (2.1)	Ｗ (7.1)	Ｄ (5.9)	不明	黄褐色			両面中央、側面１面に使用痕 。上面に３条の筋状の使用痕。	ＳＤ０１ ～０２
第12図	1	土器	杯	―	(8.8)	(4.6)	底部3／4	鈍い橙色	粗。金色雲母を多含。	硬質	ロクロ成形。 底部回転糸切未調整	ＳＥ０１
	2	土器	杯	―	(5.8)	(3.1)	底部1／3	橙色	やや粗。金色雲母多含。	硬質	ロクロ成形。 底部回転糸切未調整	ＳＥ０１
第13図	1	陶器	甕	―	―	(11.6)	破片	外：灰白色 内：灰　色	緻密。砂質	硬質	外面ナデ後タタキ 内面ナデ	ＳＥ０２ 渥美
	2	陶器	甕	―	―	(8.5)	破片	灰色	緻密。砂質	硬質	外面ナデ後タタキ 内面ナデ	ＳＥ０２ 渥美か

第１表　出土遺物観察表

調査区全景（北より）

ＳＤ０１～０３（南より）

図版　2

ＳＥ０１土層堆積状況（南より）

ＳＥ０１全景（南より）

ＳＫ０１・０２・ＳＥ０３（西より）

溝その他出土遺物

図版　4

ＳＫ０１出土遺物（１）

ＳＫ０１出土遺物（２）

ＳＥ０１出土遺物

ＳＥ０２出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	てらべむらつきだい６いせきだい２ちてん
書名	寺部村附第６遺跡第Ⅱ地点
副書名	新山梨環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ	南アルプス市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第５集
編著者	田中大輔
編集機関	南アルプス市教育委員会
所在地	〒400－0492　山梨県南アルプス市鮎沢 1212　TEL055－282－7777
発行年月日	西暦 2005 年３月 15 日

ふりがな		てらべむらつきだい６いせきだい２ちてん
所収遺跡		寺部村附第６遺跡第Ⅱ地点
ふりがな		やまなしけんみなみあるぷすしてらべ 1868 ばんちほか
所在地		山梨県南アルプス市寺部 1868 番地外
コード	市町村	19208
	遺跡	WK-31（南アルプス市遺跡番号）／ 41031(旧若草町遺跡番号)
1/25000 地図名		小笠原
経緯度		北緯　35°　36′　48″（JGD2000）
		東経　138°　29′　28″（JGD2000）
標高		268 m
調査期間		20040123 ～ 20040303
調査面積		507.0 ㎡
調査原因		道路建設
種別		散布地
主な時代		弥生時代後期～古墳時代前期・平安時代後半・中世
主な遺構		溝・井戸址・土坑
主な遺物		土師器・土師質土器・陶器等
特記事項		

南アルプス市埋蔵文化財調査報告書第５集

寺部村附第６遺跡第Ⅱ地点

新山梨環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005年３月15日発行

編集発行　南アルプス市教育委員会
〒400-0492 山梨県南アルプス市鮎沢1212
電話 055-282-7777

印　　刷　ほおずき書籍株式会社
〒381-0012 長野県長野市柳原2133-5
電話 026-244-0235